

0.はじめに

日本人が英語を学ぶ場合に、日本語と英語とを1対1に対応させてしまうことにより、よく間違えたり、誤解していたり、理解が困難である、表現や語句がたくさんある。この論文では、具体例をあげることにより、それらの根底にある問題点を解決するための有効な一つの方法として、対照言語学的観点の導入を考えてみることにする。

1. 対照言語学的観点の必要性

対照言語学とは、石綿敏雄・高田誠(1990)によると、「二つ、あるいは、二つ以上の言語について、音、語彙、文法等の言語体系、さらには、それらを用いる行動である言語行動のさまざまな部分をつきあわせ、どの部分とどの部分が相対応するか、あるいは、しなやかさを明らかにしようとする言語研究の一分野である」のだが、ここでいう対照言語学的観点とは、日本人は英語と日本語を1対1に対応させてしまう傾向があるので、日英語における差異を認めながら、共通性を理解するということである。というのも、これがなければ、英語を学んでいるのに、結局はいつまでたっても英語を日本語のフィルターを通してしか理解できなくなるからである。

2. 要素の省略という考え方

今まで英語教育において省略について触れられる場合は、ほとんどの場合、接続詞の省略や関係代名詞の省略という機能語の省略ばかりであり、要素の省略についてはあまり説明されていない。また、日本語と英語を対照した、要素の省略現象の説明は、全くと言っていいほどされていないのである。この要素の省略というのは、文脈などの情報により、文の要素を省略するというものである。この考え方を応用すると、英語教育にうまく応用できる場合が多い。ここでは、その中の動詞に関するものを、いくつか例をあげて考えてみることにする。まず、次のrobという語の例を見ていただきたい。

- (1) a. He robbed the safe.
- b. He robbed the bank.
- c. Christine answered. "He took a shotgun off a villain who was robbing a post office." -- Ken Follett, *Eye of the Needle*, p.36

この文は日本人英語学習者がよく間違えるものだが、(1a)の意味を、「彼はその金庫を奪った」というふうに解釈する英語学習者が非常に多い。これが間違いであることを理解させるには、(1b)のような英文を示せばいいであろう。「彼はその銀行を奪った」という意味はおかしいと感じるからだ。もともとrobという単語はrob ... of ~という形で、「...か

ら～を奪う」という意味を表すことはほとんどの学習者は知っている。ところが、rob ... という形で使われると、「...から奪う」という意味なのだが、「...を奪う」と訳してしまう。というのも、日本語では特別な場合を除いて、「...を」という要素は「奪う」という動詞の場合、省略しないのである。ところが、英語の場合は、(1c)のように、奪うものを省略する場合がある。特に、「...から現金を奪う」という場合には、頻繁にこの現象が見られる。

もう一つ例を見ていただきたい。よく、stop doing は「～するのをやめる」という意味で、stop to do は「～するために立ち止まる」という意味だと説明される。そして、学習者は、どちらの表現がどちらの意味だったかがわからなくなる。そして、もう一つの問題は、stop to do は「～するために立ち止まる」という訳語が正しいかどうかということだ。そこで見ていただきたいのが次の例である。

- (2) They both stopped talking to observe the entrance of Sylvester Stallone.
-- Jackie Collins, *Hollywood Wives*, p.19

この(2)の例を見れば分かるように、stop という動詞は stop doing to do という形で「...するために～をやめる」という意味で使われるのである。つまり、stop doing と stop to do の対立で教えるのではなく、文脈の情報によりどちらかの要素が省略されると考えるべきである。こう考えると、stop to do は「～するために立ち止まる」という意味ではなく「～するために今していることを中断する」という意味であることがはっきりするであろう。日本語では doing で表す要素を、普通は省略しないので「～するために立ち止まる」というふうに、「立ち止まる」と訳しているのである。しかし、これだと、主語で表される人はいつも歩いていなければならないことになってしまうのである。

同じように(3a)(3b)のような leave ... と leave for ~ の意味の違いも leave ... for ~ という形を考えると、簡単に理解できる。「～に向けて...を出発する」という意味になる。leave の場合は日本語でも「～に向けて出発する」というふうに、「...を」という要素が省略できるので、そんなに問題にはならないが、2つの別々の表現ととらえて混同するよりは、このように一つの表現の要素の省略と考えるほうが分かりやすいであろう。

- (3) a. He is going to leave Osaka tomorrow.
b. He is going to leave for Osaka tomorrow.

また、英語では、read, write, drink, etc. という動詞は、目的語が省略された場合それぞれ「本を読む」「手紙を書く」「酒を飲む」という意味で使われるが、日本語では「飲む」というときには「酒を飲む」という意味で使われるが、他の場合は要素を省略することはまれだ。このような違いにも注意しなければ、正確な意味が把握できないであろう。

このように、英語教育において、対照言語学的観点から要素の省略という概念を持ち込み、日英語の違いに注目させることによって、英語学習者の理解を高めることができるのである。

3. 表現の言い換えの問題点

英語を英語で教えることの実践などから、英語の熟語を英語で置き換えて教えることが多くなった。しかし、語句の言い換えは機械的に教えられることが多い。この方法は英語を英語で理解するのに一歩近づく方法で、効果が期待されるのだが、詳しい説明がないと、ただ単に1対1の対応を英語でおこなったにすぎなくなり、本当の理解を得られないことがある。次の英文を見ていただきたい。

- (4) a. I like music.
- b. I like music very much.
- c. I am fond of music.
- d. *I am fond of music very much.

日本語の「好きだ」という表現に対しては、英語では、like, love, be fond of という語句が考えられる。しかし、like = be fond of という公式をあてはめて覚えている英語学習者は、(4a)に対して(4b)を対応させる場合はいいのだが、(4c)に対して(4d)を対応させてしまうのである。つまり、この方法では fond は形容詞なので、直接 very を前につけて very fond of としなければならぬことが理解できないのである。

同様のことが、be familiar with という表現についても言える。「非常に親しんでいる」というのを *be familiar with it very much としてしまうのである。これらは、日英語を比較しながら品詞の概念を理解させれば、避けることができる誤りであろう。

- (5) a. He resembles his father.
- b. He resembles his teacher.
- c. Tom takes after his father.
- d. *Tom takes after his teacher.

別の例を見てみよう。普通、take after という熟語は resemble という単語で言い換えられる。つまり、(5a)は、(5c)と同じ意味になる。しかし、(5b)は(5d)とはできない。つまり、take after は「似る」といっても、元の意味を考えれば分かるように「遺伝的なものを後にとってゆく」という意味なので、血縁関係、一般的には、親子関係で子供が親に似ている時に使われるので、(5d)の様な場合には使えないのである。一方、resembleの方は、似ていればどのようなものにでも使えるのである。このように、日本語では区別しないような用法の違いが、対照言語学的に見ればはっきりするのである。

さらに別の、間違いやすい例を見てみよう。

- (6) a. I'll love you forever.
- b. *I'll love you for good.
- c. He's leaving for good.
- d. She's giving up for good.

(6a)と(6b)の例を見れば分かるように、for ever と for good は交換可能ではない。日本語ではどちらも、「永遠に」という意味になるが、(6b)のような文では for good は使えない。というのも、Carter(1987:62)が説明しているように、for good は、'removal or detachment from' という意味の時に使われるのである。つまり、「永遠に離れて行く」とか「二度と...しない」というような場合に使われるのである。したがって、「永遠に愛す」というような場合には、for good は使えないのである。

以上のように、語句の言い換えも、対照言語学的な見方を導入することが非常に重要であることが分かっていただけだと思う。

4. 比較構文

日本語と英語の違いで、比較構文は日本人にとって大変難しいものである。たとえば、語句のレベルでは、more often than not というような語句は理解しづらいものの一つであろう。そのまま訳すと「全然ないよりもしばしば」というおかしな意味になるからだ。しかし、この表現は「50%の割合で」という意味を持つので、「しばしば」という訳語を対応させてもよいであろう。

また、次のような more than ... と「...以上」の違いもやっかいである。

- (7) a. I bought more than three books.
- b. She read more than 30 pages of the book.

よく見かけるものに、A is more than B. は、B を含まないから $A > B$ と不等号で表され、日本語の「C以上」は、C を含むので、(7a)は「私は3冊以上の本を買った」と訳さずに、「私は4冊以上の本を買った」と訳すべきだというような説明がある。それで、more than ... という表現があると、「...+1以上」と覚えてしまう。これには問題がある。というのも、(7b)のような文では、「彼女はその本を31頁以上読んだ」と訳すと、英文の意味を正しく表していない。やはり、これは「彼女はその本を30頁以上読んだ」と訳するのがいい。それでは、この二つの違いには何がかかっているのでしょうか。これには「中間段階」という概念が重要である。(7a)では、この本の冊数は「中間段階」の3冊半というものはなく3冊の上は4冊になる。ところが、(7b)の頁には「中間段階」があり、30頁の上は、30頁と1文字、2文字、...1行、2行、... というふうになる。つまり、「中間段階」がない場合には、「...+1以上」と訳し、「中間段階」がある場合には「...以上」とそのまま訳してもいいのである。

次に比較構文が否定と共に使われた例を見てみよう。これは、日本人英語学習者のほとんどが誤解する表現である。(8a)のような文では、「君にこれ以上賛成できない(=もううんざりだ)」という意味にとってしまう。英語では、この「否定+比較級」という形を使うと、「これほど...なものはない」→「最高のものである」という意味になる。つまり、(8a)は「君に全く賛成だ」という意味になる。(8b)と(8c)は「こんなに幸せなことはない」という意味を表している。

- (8) a. I can't agree with you more.

- b. "We've never been happier." — Steve Shagan, *The Discovery*, p.48
- c. "I never believed anyone could be so happy." — Sheldon, *If Tomorrow Comes*, p.4

このように、対照言語学的観点から比較構文を再考することによっても、まだまだ英語教育に生かせる事実が発見されるのである。そして、その成果を使い教育に大いに役立てることができるのである。

5. 主観表現と客観表現

次に取り上げたいのが、英語の主観表現と客観表現である。客観表現は日本語でも英語でも同じで、1対1に対応させても問題はない。たとえば、I have two brothers. は「私には兄弟が2人います」と訳してもほとんど意味の違いはない。問題があるのは主観表現においてである。例を見てみよう。

- (9) a. There's some wine left.
- b. There isn't much wine left.
- (10) a. The bottle is half full.
- b. The bottle is half empty.

主観表現は日本語にもあるので、(9a)(9b)のように同じ事象をとらえて、別の見方をする表現が英語ではあるが、日本語でも「ワインが残っています」「ワインはそんなに残っていません」と表現する。ここにはほとんどずれはない。ところが、(10a)(10b)のような文では、同じ事象をそれを述べる人の主観で別の表現で表すような場合にでも、日本語で対応する表現がないものもある。つまり、full や empty を「いっぱい」や「から」という日本語で対応させると、half full や half empty がうまく処理できないのである。「半分から」や「半分いっぱい」と訳しただけでは理解できないであろう。この場合は「半分も残っている」「半分しか残っていない」という訳語をあてる必要がある。

- (11) a. I have a few friends.
- b. I have few friends.
- c. He has a little money.
- d. He has little money.

さらに問題があるのは、little と a little、few と a few の使い分けであろう。一般的には、少しあるときには a few, a little を使い、ほとんどないときに few, little を使うと説明されている。しかし、これは説明不足である。(11a)と(11b)は同じ現実を描写するときに見えるので、「2、3人の友達」と「友達がほとんどない」との対比ではないことを理解することが重要である。(11c)と(11d)も「少し持っている」と「ほとんど持っていない」ことの対比だと単純に考えると誤解が生じる。つまり、絶対的なものではなく、相対的で主観的なものである。つまり、100人いても何億人との対比で考えれば、a few とも

few ともいえる。100万円でも、何百億円との対比で考えれば a little や little が使われるときがあるのである。これは日本語でも同じような用法があるが、英語を学ぶ場合には、日本語と対照的に考察して考えずに、訳語を与えて覚えてしまうため、きちんとした理解がされていないのである。

同じようなことが、a few と several についてもいえる。これらの表現は絶対的なものではなく、相対的なものなので、「2、3の」と「いくつかの」という訳語で対比させても仕方がないのである。several は相対的に見て a few より多く感じられるときに使われる。したがって、日本語の訳語を与えて理解させようとするのは難しいのである。

ここでは、英語を理解する上で主観表現に関して相対的な見方が必要であることを、2、3の例をあげて対照言語学的に述べたが、これは他のいろいろな表現についても言えることである。

6. まとめ

以上、英語教育への対照言語学的観点の導入について、例をあげて考えてきた。対照言語学的観点は、これまでの英語教育において実践されてきた日本語に訳すという教育方法の欠点を補うためにも、また、これから盛んになるとと思われる英語を使つての英語教育にも欠かせないと思われる。外国語を習得するというのは、最終的には、母国語の干渉を克服するということであると言える。その場合に対照言語学の研究手法や成果が非常に重要になると考えられる。

注

この論文では、紙面の制約により、1992年10月18日に日本英語コミュニケーション学会全国大会において「英語教育への対照言語学的・語用論的観点の導入について」と題して発表したものの中から、「対照言語学的観点」のみを取り上げて、特に筆者独自の考察であるものを中心に論じた。なお、他の具体例に関しては、この発表で触れたたくさんの例のうちの一部を別の観点からまとめた、奥田隆一(1993)「日英語の違いと英語教育」を参照していただきたい。また、発表で取り上げた「語用論的観点」に関しては稿を改めたい。

参考文献

- Allsop, J. (1983) *English Grammar*. Cassell.
Carter, R. (1982) *Vocabulary*. Allen & Unwin.
Chalker, S. (1990) *English Grammar: Word by Word*. Nelson.
Close, R.A. (1981) *English as a Foreign Language*. (3rd Edition) George Allen & Unwin.
石綿敏雄、高田誠(1990)『対照言語学』桜楓社。
奥田隆一(1981)「日英比較と英語教育」『近畿大学教養部研究紀要』第12巻、第3号。
_____ (1984)「語法と英語教育」『近畿大学教養部研究紀要』第16巻、第1号。
_____ (1987)『日英比較・語法英作文』弓プレス。
_____ (1993)「日英語の違いと英語教育」『近畿大学語学センター紀要』第2号。